

四旬節、思い上がりを正す時

主任司祭 高木 健次

教会は復活祭を準備するための期間、四旬節を過ごしています。この四旬節の意味をミサの中で司祭が唱える祈りのことばは次のように表現しています。「四旬節にあたり、罪深いわたしたちは節制によって思い上がりを正し、あなたのおつくりしみにこたえて貧しい人を助け、悔い改めのわざを通して感謝をささげるよう招かれています」(叙唱 四旬節三)。今回はこの中で、特に「思い上がりを正し」ということに注目したいと思います。思い上がり、言い換えれば高慢は、自分は正しい、自分は知っているという考えから動くこうとしないことと言えるでしょう。この高慢はキリスト教の伝統の中で、罪の女王とさえ言われることがあります。それだけわたしたちはこの高慢の影響下に陥りやすく、そこから色々な他の罪も生じるので、絶えず戦わなければならない課題です。さて、この高慢、思い上がりを正すということをこの四旬節に意識することは、特別な意味があるように思います。それは四旬節が、共同体として新しいメンバーを迎え入れる準備をする時でもあるからです。実際、四旬節はその年の復活祭に洗

礼を受ける洗礼志願者と、その人たちを受け入れる共同体が、祈りと断食をして最終的な準備をしてきたことをその起源とすると言われています。新しく共同体に加わろうとする人たちは、教えを学び、新しい生活様式に入るために準備が必要なことはわかります。ではどうして受け入れる側の共同体も祈りと断食をして準備したのでしょうか。それは、受け入れる側こそ、高慢の危険にさらされているからなのではないでしょうか。自分たちは教えてあげる側、変わるべきは新しい人たちで、自分たちは今まで通りでよい、と考えてしまうなら、新しいメンバーをその民に加えられることを通して語られ、民全体を成長へと導こうとされる神様に心を閉ざしてしまうことになりかねません。そこで新しい仲間を迎える共同体全体が思い上がりを正す恵みを願う必要があるのだと思います。日本社会では、この季節に教会だけではなく、色々な場で新しく加わる人がおり、迎える人がいることでしょうか。お互いが謙遜の心で受け入れあい、新しい恵みにであうことができすように。